



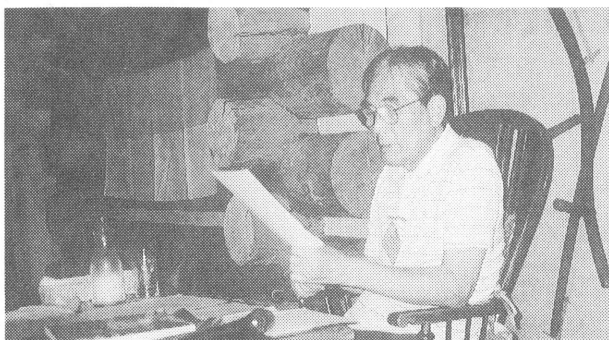
Eiche

# Die Eiche ティ・アイヘ

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in der Präfektur Chiba

事務局 〒274-0822 船橋市飯山満町2-518-1 第二ワールド ナーシング ホーム内  
TEL 047-461-9111 FAX 047-461-7010

## 講演会とビール祭り



講演する柴田氏



谷村氏

今年で第5回となるビール祭りは、ドイツのオクトーバーフェスト(9/16~10/3)より一足早く9月9日(土)の午後2時より、JR 船橋駅南口近くのレストラン「タタンカ」にて開催された。加藤会長による開会挨拶の後「イチョウとケンペル」と題して会員の柴田松太郎氏による講演(要旨裏ページ)が約1時間にわたりに行われた。

3時過ぎ谷村政次郎氏(元海上自衛隊音楽隊長)の音頭で乾杯、「EIN PROSIT」の合唱でビール祭りへ。

途中、当協会理事で日本チター協会会長内藤先生より頂いたチター演奏会招待券や高級ワイン、映画招待券、レストラン割引券、「オリゴのおかげ」の当たるくじ引きを行い、更に、「乾杯の歌」「友よ飲めや」「ミュンヘン・ホフプロイハウスの歌」「野ばら」等を皆で合唱し盛り上がった。

特に今回は、土生(はぶ)氏のアコーディオン伴奏で会員の笹本正子さん(上野学園音大卒)に「この道」「ブラームスの子守歌」、又、(財)日独協会会員の安藤恵美子さん(武蔵野音大卒)にモーツァルトの「春へのあこがれ」とシューベルトの「野ばら」を合唱してもらい、又歌唱指導もお願いして参加者に大いに喜ばれた。

最後は、明海大学客員教授石河正夫氏の中締めで閉会。楽しいビール祭りであった。(参加者23名)

### 「長井長義(ながい ながよし)展」に参加して

理事 友野信善

この度「ドイツにおける日本年」行事フィナーレの一環として行われたデュッセルドルフゲーテ博物館における「長井長義展」の開会セレモニーに、私も参加させて頂きました。

その詳細につきましては、Die Bride 九月号に、藤本修様により紹介されていますが、改めて明治の先達の凄まじい努力と研鑽により先進国文明が取り入れられた実態を如実に目で見える形で紹介され、本当に感動致しました。ここにメイングェストとしてご出席されました長井長義博士のお孫様、長井貞義様ご夫妻と、私はひとときの行動を共にさせて頂きました。その経緯につき述べたく思います。

去る一月後半、習志野市教育委員会主催による「特別資料展ドイツ兵士の見た NARASHINO 1915-1920 習志野俘虜収容所」の折に、ワルター・イエーキシュ、ルードウィッヒ・ザイツの両氏からは、殊に沢山の資料の提供を頂きました。このお二方にお会いし、習志野市に代わって謝辞を申し上げて参りました。ザイツ氏は第二次大戦の折、ドイツ潜水艦U510にて来日、三ヶ月を日本で過ごした後この潜水艦で無事帰国されたという希有な体験の持ち主です。

一方長井長義氏も同じ時期にドイツ潜水艦に通訳情報担当官として乗り組まれており、この折の体験をグラフィックアークシオン誌に発表。しかしこのUボート名と艦長名の記録/記憶が失われていたのを、ザイツ氏は不屈のドイツ魂で奇跡的に解き明かされ、それがDieselであり、艦長はユンカー氏でした。(ユンカー氏はほんの数週間前に逝去された由)

この長井長義氏とザイツ氏をニュールンベルグで引き合わせる事が、実は私の目的でした。九月四日午後六時、ルメルディエンホテルにて、この邂逅が果たされました。私にとり、両人の歴史的な会合に立ち会えた非常に貴重な瞬間でした。お二人とも八十才を越すご高齢、しかしそのお元気さはさすが元海軍軍人の姿でした。長井長義氏は、日独親善の最前線で働かれ、その結果長井長義、長井重歴山、長井貞義と父祖三代にわたってドイツ功労大十字勲章を受けられております。長井貞義氏の本当に達者なドイツ語を通し、その実績をかいまみる思いでした。

## ～今後の催物案内～

### ▶ ドイツ軍人病没者追悼慰霊祭

日時：11月26日(日) 11:00AM～  
 場所：船橋市習志野霊園内 JR 総武線津田沼  
 駅北口よりバス15分「自衛隊前」下車、  
 正門の左手50mで左折直進7分

### ▶ クリスマスパティー

主催：(財)日独協会  
 日時：12月14日(木) 18:30PM～  
 場所：帝国ホテル「孔雀の間」(本館2階)  
 会費：10,000円(同伴家族:9,000円)  
**福引特賞は、ドイツ往復航空券**  
 申込み：TEL、FAXにて  
 事務局 平田事務局長迄



独唱する笹本さん



安藤さんと土生(はぶ)氏

## イチョウとケンペル

会員 柴田松太郎氏(元都立鷺宮高校教諭、古生物研究家)

イチョウは、植物の中で「化石」といわれる珍しい種であり、ケンペルも日本からドイツに持ち帰った程である。そして1990年は、E.ケンペルが長崎の出島にあるオランダ東インド会社の商館付きの医者として赴任してからちょうど300年になるので、それを記念してケンペル展が東京・大阪・横浜・長崎の4会場で逐次開催された。展示された貴重な品々のなかに、複製ではあるが、有名なゲーテの西東詩集の中的一篇「銀杏の葉(Ginkgo biloba)」があった。その詩はゲーテ直筆のものであり、その詩の下にはハイデルベルグ城の庭で拾った2枚のイチョウの葉が貼り合わせてある。

ゲーテは詩人であると同時に科学者でもあった。それは彼の論文「植物変態論」の中でイチョウの葉の形成過程を論じていることでも良く分かる。従って、イチョウの学名が"Ginkgo biloba"であるということは勿論知っていた。

ところで、Ginkgo は銀杏の属名で、C.v.リンネ(1707-1778)によって1771年に定められた。彼はスウェーデンの植物分類学者でイチョウの学名を決めるのにE.ケンペル(1651-1716)の著書「廻国奇観(かいこくきかん)」(1712)の中のイチョウのスケッチと簡単な記述を参考にした。E.ケンペルはオランダ東インド会社の出島商館付医師として1690-1692年の約2年間日本に滞在したドイツ人である。その著書の中で彼はイチョウについて「銀杏 Ginkgo, vel Ginan, volgo Itsjo. Arbor nucifera folio Adiantion.」と書いている。イチョウの属名の Ginkgo はこの E.ケンペルの記述から採られた。

ところで、イチョウの属名 Ginkgo について、銀杏の音読みからとすると、Ginkyo の誤植なのか、それとも Ginkio の誤植なのかという疑問がある。E.ケンペルは日本滞在中当時の植物図鑑「訓蒙図彙(きんもうずい)(1668)」を参考にして日本の植物を研究した。そのイチョウの項目には、名称として「ぎんあん、白果、銀杏樹、鴨脚樹、いちやう」が示してある。廻国奇観の記載と比較すると、「ぎんきやうじゅ」と「ぎんあん」と「いちやう」が共通している。そうすると Ginkgo は、Ginkyo と書いてあったのが、印刷の時に y を g としてしまいそのままになってしまったのではないかという事にもなる。しかし彼はヘボン式ローマ字を知る由もなく、また Itsjo という表記を見ても分かるように、彼は母国語のドイツ語式に書き綴っている。とすると E.ケンペルは、Ginkyo ではなく Ginkjo と書いたはずで、それが Ginkgo となったとする方が理に適っている。